書評

『持続可能な世界に向けた新たな環境教育』藤村コノヱ著

社会変革への素敵な贈り物

地球温暖化による気候危機が深刻化し、「気候崩壊」の言葉まで登場した。新型コロナウイルスによるパンデミックが世界を直撃する一方で、ロシアのウクライナ侵攻、ハマスとイスラエルの戦闘が起こった。核戦争の脅威もある。誰もが「世界がおかしくなっている。何かできることはないか」と考えるだろう。

そんな中でNPO法人環境文明21代表の著書『持続可能な世界に向けた新たな環境教育』が出版された。豊富な体験に基づき、的確な現状分析と世の中を変えるにはどうしたらいいかを分かりやすく示した。私には同書は混とんとした時代向けの「素晴らしい贈り物」に思える。多くの人が読んでほしい。

順を追って主な内容を見ていこう。第1章は「危険な世界に生きている私たち」。命の基盤となる環境の危機として、異常気象の頻発などの気候危機と自然の恵みをもたらす生物多様性の危機を挙げた。さらに非正規雇用の増加や経済格差、出生率の低下など暮らしと命の危機、子どもへの虐待や「今だけ、金だけ、自分だけ」の風潮といった人間性の危機、議論をしない国会などを例に民主主義の危機に触れている。

第2章「持続社会に向けた教育と学びの今」は、目先の経済優先の教育が重視され、経済に役立つ人間の育成が中心となった日本の教育の限界を指摘し、より良き人生と持続可能な社会の実現を意識した教育改革の必要性を訴えた。物質的には豊かに見える子どもたちが精神的には決して幸福を感じていない現実もあるという。

第3章「日本の市民社会（NPO/NGO）の今」では、市民社会を支える仕組みが乏しいことを強調。＜環境文明21が活動を開始した約30年前と変わらぬ「行政からも市民からも支援が得られない」日本の環境団体の厳しい現状は続いています＞＜NPO/NGOの誠実さと実力を認め、政策作りへの参加やそのための支援を少しでも進めてほしいと願っています＞と述べている。その通りだろう。

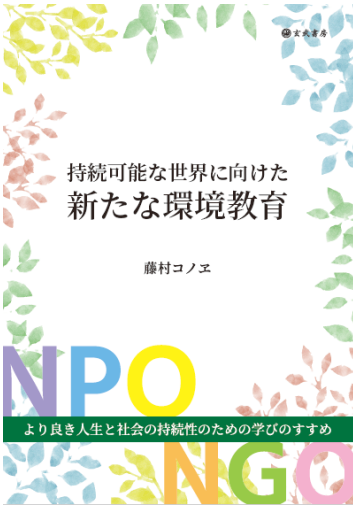
最後の第4章「環境と持続可能性のための教育・学びの提案」が結論部分だ。現在のような経済重視の教育ではなく、予測困難な新しい時代にも適応できる力を育む「持続可能な社会に向けた教育」に転換することを提唱し、＜教育や学び本来の姿を取り戻すことが、学校教育だけでなく、私たち大人の学びにとっても大切なことです＞と指摘している。

一般に人にもできそうな行動として、まずは話してみる、気候市民会議に出席する、NPO/NGOの活動に参加する、地元の政治家に働きかける、本当の豊かさ、幸せとは何かを考えてみる、の5つを提案。中でも＜様々な危機の中で生きていかざるを得ない私たちこそが、子や孫の時代のことも考えて、本当の豊かさとは何か、幸せとは何か、を考え直し、行動を変える時期にきているのではないでしょうか＞の記述は強く印象に残る。

小学校教員を経験し、環境教育等促進法の成立に力を尽くした藤村さん。50歳を過ぎて、環境問題の政策形成にはNPOの参画が有効かつ不可欠なことを学問として立証しようと大学院に通って博士号を取得した。3年間は土日・祝日は家にこもって本を読み論文を書く日々だったと述懐する。今回の著書の執筆には通常の仕事をこなしつつ1年かけて取り組んだという。その教育・学びへの意欲に頭が下がる。

環境文明21初代代表の加藤三郎さんは、2020年秋に自らの活動の集大成として『危機の向こうの希望』を出版した。会員の一人として、環境文明21はこんな2人を中心に30年余活動を続け、優れた業績を上げたのだと痛感した。後継者を育ててほしいと願うし、少しでも今後の活動の役に立ちたいと思う。

横山裕道（よこやま　ひろみち / 科学・環境ジャーナリスト）



出版：玄武書房
※ Amazonにて購入可。Amazonでの購入が難しい方は事務局まで